

一海軍士官の 太平洋戦争

等身大で語る戦争の真実

斉藤一好

Saito Kazuyoshi

一海軍士官の 太平洋戦争

等身大で語る戦争の真実

斉藤一好

Saito Kazuyoshi

斉藤 一好（さいとう・かずよし）

1920年、山梨県に生まれる。県立甲府中学卒業後、1938年、海軍兵学校に入学（第69期生）。41年3月、同校卒業。少尉候補生として、戦艦陸奥をへて連合艦隊旗艦の長門に乗り組み、同年12月の日米開戦を迎える。42年6月、駆逐艦雪風に転属、当初は航海士、次に水雷長を務める。44年2月、雪風を退艦、潜水学校をへて同年8月、巨大潜水艦イ400の機装員、続いて同艦の水雷長に就任。45年7月、米太平洋艦隊の根拠地ウルシー環礁への特攻攻撃のため出撃、特攻攻撃直前、洋上にて敗戦を迎える。

戦後は、弁護士への道をめざし、46年、東大法学部に入学、51年に弁護士活動を始める。54年、青年法律家協会の結成にさいしては発起人として参加。その後、スモン薬害訴訟や水俣病裁判の弁護団に参加する一方、55年の発足時から国際民主法律家協会（IADL）の活動に参加、国際書記、副会長（90～96年）などを務める（現在は顧問）。他に、66年、東京弁護士会副会長、70年、日本弁護士連合会理事等も務めた。著書『いくさの庭から法の庭へ』（昭和出版）

一海軍士官の太平洋戦争

＊等身大で語る戦争の真実

●二〇〇一年二月八日——第一刷発行
●二〇〇二年二月二〇日——第二刷発行

著者／斉藤 一好

発行所／株式会社 高文研

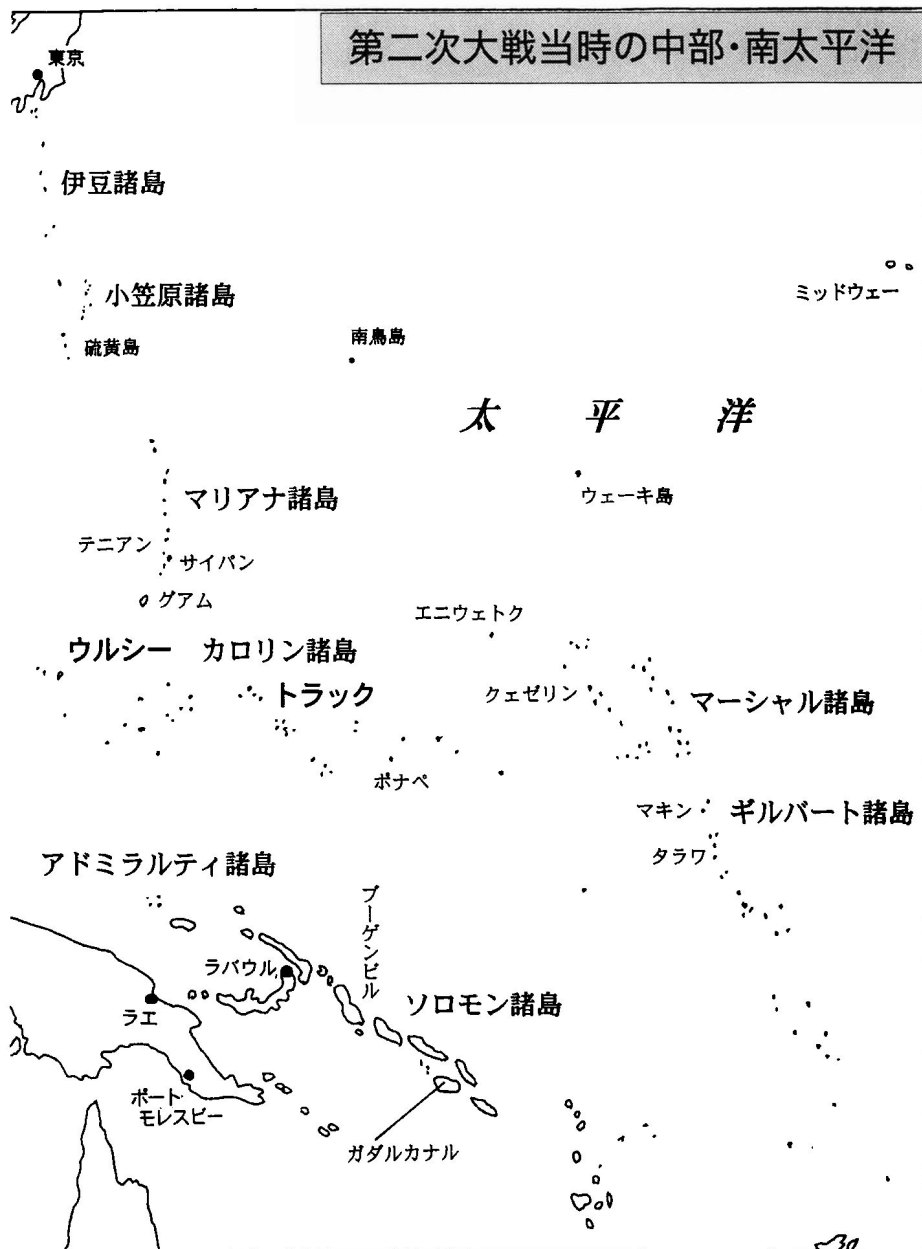
東京都千代田区猿樂町二一―一八
三恵ビル（千一〇一―〇〇六四）
電話 03-3295-3415
振替 001600-618956
<http://www.koubunken.co.jp>

組版／高文研電算室

印刷・製本／三省堂印刷株式会社

★万一、乱丁・落丁があったときは、送料当方負担でお取りかえいたします。

第二次大戦当時の中部・南太平洋





装丁 商業デザインセンター・松田 礼一

一海軍士官の太平洋戦争——目次

1 太平洋戦争開戦からミッドウェー海戦まで…………… 1

＊連合艦隊の旗艦「長門」艦上で聞いた日米開戦

＊連合艦隊主力の出撃と中途からの帰還

＊嶋田海軍大臣が持参した「虎屋の羊羹」

＊瀬戸内海にいても恐れた敵潜水艦の攻撃

＊旗艦の交代——長門から大和へ

＊非科学的だった図上演習

＊ミッドウェー海戦

＊私が考えるミッドウェー海戦の敗因

＊虚構の大本営発表

＊瀬戸内海帰着と駆逐艦「雪風」への転勤

2 海軍兵学校のエデュケーション…………… 32

＊海軍へのあこがれ

＊深まる軍国主義化の風潮の中で

＊海軍兵学校に入る

＊兵学校教育の輪郭

＊兵学校での生活——全寮制・分隊単位の共同生活

＊兵学校での教科の内容

＊兵学校教育の特徴

＊兵学校を出て

＊戦艦長門に乗り組む

＊開戦前夜

3 駆逐艦雪風での最初的大海戦

＊初めてのラバウル行——輸送船南海丸の護衛

＊巡洋艦最上を護衛して佐世保へ

＊南太平洋海戦（サンタクルーズ沖海戦）

＊第三次ソロモン海戦

4 ガダルカナル撤収作戦

＊気の重い嫌な作戦

＊「餓島」と化したガダルカナル島

＊集結した二〇隻の駆逐艦

＊第一回撤収作戦

米第二回の撤収作戦

米第三次撤収作戦に至る舞台裏

米第三次撤収作戦

米撤収作戦をめぐる評価

米そらぞらしかった大本営発表

米今も気にかかること

5 ダンピール海峡の悲劇

米ラエに向かう船団

米救助した陸兵であふれた駆逐艦

米米軍の恐るべき新戦術「反跳爆撃」

米暗夜の海上搜索

米沈黙した大本営発表

6 コロンバンガラ沖夜戦

米山本司令長官の戦死とアッツ島玉碎

米初めて経験した魚雷戦

米「顔」の见えない近代戦

7 シンガポールへの空母護衛と船団護衛……………145

※「絶対国防圏」の設定と深まる敗色

※二度にわたるシンガポールへの護衛

※雪風との別れ

8 潜水学校に入る……………154

※潜水艦水雷長への道

※結婚

※潜水学校で私が行った二つの調査

9 巨大潜水艦イ四〇〇に乗組む……………162

※巨大潜水艦をつくりだした「思想」

※パナマ運河攻撃の図上演習

※疑問だらけだったウルシー特攻作戦

※出撃準備

10 ウルシーへの出撃と敗戦……………176

※太平洋上で受け取った「終戦の詔勅」

＊艦内で知ったポツダム宣言の衝撃

＊米軍に拿捕されたイ四〇〇

11 捕虜生活とイ四〇〇の艦内生活

＊捕虜の生活

＊かいま見た米軍の素顔

＊イ四〇〇艦内生活でのエピソード

186

12 太平洋戦争をかえりみて

＊戦争と人間の真実

＊日本軍がもてなかつた戦争の「大義」

＊死んだ者と生き残った者

＊一五年戦争における日本海軍の戦争責任

196

13 戦後——私が歩いた道

＊復員

＊法学部三年間で印象に残る四つのこと

＊青年法律家協会（青法協）の結成

214

- ＊スモン裁判から水俣病裁判へ
- ＊ハンセン病患者のたたかいに教えられたもの
- ＊国際民主法律家協会での活動
- ＊再び極東国際軍事裁判について
- ＊B C級戦争犯罪について
- ＊靖国神社問題について

あとがき

1 太平洋戦争開戦からミッドウェー海戦まで

※連合艦隊の旗艦「長門」艦上で聞いた日米開戦

太平洋戦争は一九四一年（昭和十六年）十二月八日、日本海軍のハワイ真珠湾（パールハーバー）攻撃によって始まりました。私が日米開戦を知ったのはその前日、七日の午後四時のことです。その時の衝撃と興奮を、私は忘れることができません。

当時、私は、瀬戸内海の西部、柱島水道の特設ブイに繋留中の連合艦隊旗艦の戦艦長門の乗組で、海軍少尉でした。「連合艦隊」とは当時、中国方面を担当していた「支那方面艦隊」を除き、日本海軍の全戦力を結集した艦隊のことです。

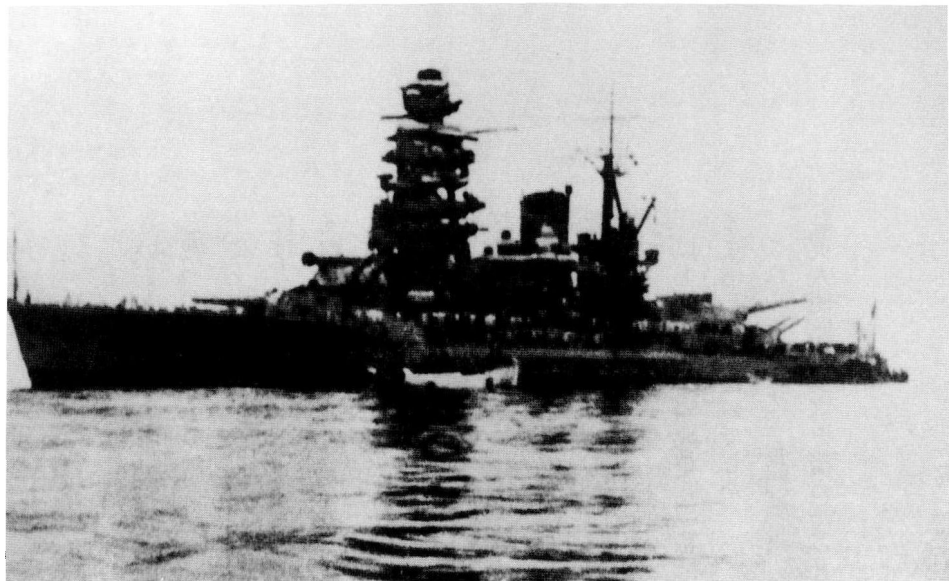
長門の艦長、矢野英雄大佐は、後甲板に総員集合した私たちに、明十二月八日未明の米

英との開戦を告げ、わが方の機動部隊（航空母艦を主力とする部隊）によるハワイ空襲、そして同日正午に予定されたわが長門をはじめとする連合艦隊主力の出撃、それによる機動部隊支援の作戦計画を語ったのです。

私自身、この艦長訓示にどのような反応を示したのでしょうか。率直に告白すれば、恐れおののいたのです。

後に述べるとおおり、私はその年の三月、江田島^{えただじま}の海軍兵学校を卒業しましたが、私が兵学校に入校したのは一九三八年（昭和十三年）四月で、その年、国家総動員法が施行され、翌三九年九月、ヨーロッパで第二次世界大戦が勃発、四〇年九月には日本海軍の北部仏印（現在のベトナム北部）進駐、日独伊三国同盟の締結、というように、日本をとりまく情勢は風雲急を告げつつあり、兵学校教育も短縮を重ね、本来は四年制であったものが一年繰り上げ卒業となったのでした。

当時の連合艦隊は猛訓練を重ねていましたし、私たちは兵学校卒業後、練習艦隊に乗り組んでアモイ、パラオ、横須賀と遠洋航海をしました。その際も終始、灯火管制^{とうかかんせい}をしながらの潜水艦襲来に備えた警戒航行でした。また、その年の六月には陸軍が南部仏印（今のベトナム南部）へ進駐、八月にはアメリカの対日石油禁輸、そして息づまるような外交交渉と、日米間に陰悪な空気が日増しに強まっていました。しかしそれでも私たちの周囲



1941年当時の戦艦長門。1920年に竣工、その後2度の改装を行った。(文殊社提供)

には、まだ日米開戦必至^{ひつし}という空気はあまり感じられませんでした。

もつとも、長門^{ながと}でしばらく一緒にあつた同期生で、その後第六駆逐隊^{くちくづたい}付となつていた宮原重弘少尉候補生(少尉候補生とは、兵学校卒業から少尉任官までの身分をいい、陸軍の見習士官に相当します)が長門に所用でやってきた際、彼から、連合艦隊の作戦命令をかいま見たところ、南太平洋のフィジー、サモアまで作戦予定戦域がひろがつていた、ということを知りました。しかし私は、これについても、一つの仮定の問題としてあまり気に止めませんでした。

なお、私たち長門配属になつた少尉候補生約一〇名には、小代^{おしろ}正少佐という方が指導に当たつていました。小代少佐は長門の運用長(錨のあげおろし、艦体の保守整備、搭載舟艇の保守などの責任者)でしたが、同少佐は私たちに対し、君たちは早く結婚しな

さい、と言っていました。というのも、日米開戦はあり得ない、なぜなら日本はアメリカと戦って勝つ見込みはない、日本がアメリカを屈服させるためには、日本軍をアメリカ本土に上陸させねばならないが、そんなことは不可能であるから———というのです。小代少佐はまた、海軍には、勇者は家庭をかえりみないで任務に当たるものだという者がいるが、それは誤りである、真の勇者は家庭を愛し、その上で後顧の憂いなく奮闘するものである、と言うのでした。

また私は、兵学校で、後藤機関大尉から「石油」というテーマで講義を受けたことがあります。同大尉は、日本海軍の石油の備蓄は、対米戦で一年半しかもたないといっていました。この後藤大尉の話も、小代少佐の話を裏づけていました。

小代少佐はさらにつづけて、日本海軍は米海軍と比較して、戦術的には優れているが、戦略的には劣っていると断言していました。なぜなら、日本海軍には石油が不足しているので、石油をふんだんに使った大規模の演習ができないからだということです。

以上のような知識から、私は、当時対米戦は考えられないという小代少佐の言を、そのまま信じていたのでした。

これらに加えて、長門艦長、矢野大佐の話があります。この矢野大佐は英会話が巧みで、駐英大使館付武官を務めたこともある方です。